

コロナに負けない お茶大の教育



コロナ禍のお茶大の教育について、
教育担当の新井副学長にお話をうかがいました。

ピンチをチャンスに!

コロナ禍でもお茶大らしい教育を

新井 由紀夫

理事・副学長 (教育改革・入試改革担当)

2021年より現職。基幹研究院人文科学系教授を兼務。
専門は、西洋史学、イギリス中世史。最近の著書には、『中世のジェントリと社会』(山川出版社、2020年)がある。

2020年1月、国内で初めての新型
1年半が過ぎ、コロナ禍における教育
感染防止対策に万全を尽くし行う実
今回は、お茶大の新しい生活様式に

コロナウイルス (以下コロナ) の感染者が報告されてから、
も2年目に入りました。お茶大では、Zoomを活用したオンライン授業や
習など、様々な工夫のもと、教育を行っています。
おける教育についてお届けします。

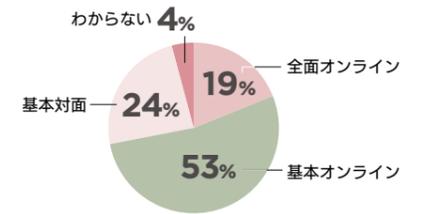


図1 2021年後期からの授業形態の希望

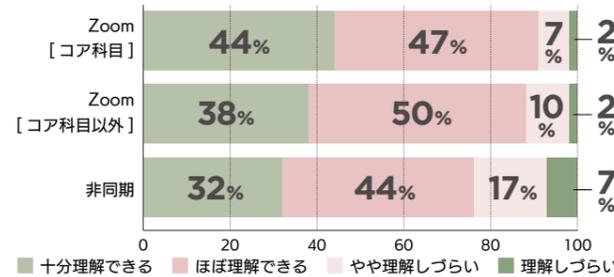


図2 オンライン授業理解度 ※「受講していない」と回答した者を除く

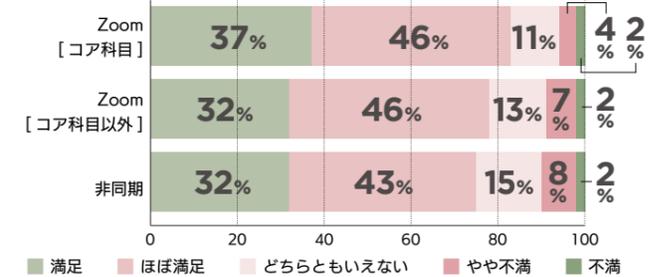


図3 オンライン授業満足度 ※「受講していない」と回答した者を除く

(アンケート実施期間: 2021年7月30日~8月9日/回答者数: 1,429人/対象者: 学部生、大学院生(休学者を除く) 2,807人(回収率: 50.9%))
2021年度後期からの授業形態の希望をたずねたところ、53%が基本オンラインと回答し、全面オンラインとあわせると70%以上の学生がオンライン授業を受け入れていることがわかります(図1)。そこで、理解度と満足度を調べたところ、70~90%が十分理解できる・理解できる、または、満足・ほぼ満足と肯定的な回答をしています(図2・3)。この背景には、授業の様々な工夫があるからだと考えます。

Q コロナ禍の教育も2年目に入りました。お茶大での
コロナ禍の教育の概要をご説明いただけますか。

A このコロナは誰もが経験したことがない出来事であり、これまでの大学の常識が通用しなくなりました。しかし、お茶大は小規模な大学であったことから、教員と職員がどのようにしたら、このピンチをチャンスにもっていけるかと、一致団結して、お茶大のコロナ禍の教育を作ってきました。現在の教育体制の基盤は、2020年3月から2ヶ月間で準備しました。このとき、「教育を止めない」「誰一人取り残さない」ことを基本としました。これは今でも続いています。

Q その2ヶ月間に、具体的にどのような準備が
されたのですか。

A MoodleやPloneといったオンライン非同期型授業のための学修管理システムの強化、そして、新たに、オンライン同期型授業ができるように、Zoomを導入しました。Zoomは我々教員も初めて使う人が多かったため、マニュアルも作成しました。そして2020年度は、5月7日に開講、最初の1週間は学生や教員からの質問が殺到したのですが、2週間後には落ち着き、5月末に学生対象に行ったアンケートでは、オンライン授業の理解度は87%、満足度は80%と非常に高い肯定的な意見でした。さらに、オンライン授業受講環境に困難がある学生に対して、モバイルWi-Fiの無償貸与も行いました。

Q Zoomだけでなく、対面授業もお茶大では
行っていますね。

A お茶大では、「新型コロナウイルス感染防止対策室」を設置し、「新型コロナウイルス感染拡大防止のための活動ガイドライン」を作成しています。このガイドラインにそって、授業の方法を決めています。たとえば、レベル1のときは、基本オンライン授業ですが、実験実習だけでなく、専門科目も含めて約4割の科目を対面授業とするブレンド型の授業形態を設定しています。一方、レベル3のときには、全面オンライン授業で対面授業は無しとなります。このレベルは、全国の感染状況を踏まえ、新型コロナウイルス感染防止対策室が決定します。

Q 先ほどもお話がありましたが、お茶大では頻繁に
学生を対象に授業アンケートを行っています、
どのようなことをたずね、結果はどのように
活用されているのですか。

A たとえば、授業形態に対するニーズは、毎回聞いており、2021年8月に実施した結果では、2021年度後期からの授業形態について、半数以上が基本オンライン授業希望と回答しています。このような授業に対する意見は、教職員で共有し、教育活動に活用しています。他にも、授業のことだけでなく、2021年6月には、経済状態について質問しており、その結果をもとに、みがかずば支援奨学金を創設し、学生支援を行いました。

Q アンケートの結果から、いろいろな学生の声を知る
ことができるのですね。

A もちろん、学生からは肯定的な意見ばかりではなく、きびしい指摘もあります。たとえば、コロナ禍になってから課題が増えたという意見がよく聞かれます。これは筆記テストをレポートに変えた授業が多く、さらに、アクティブラーニングアワー(学生が主体的に学ぶ時間、以下ALH)が導入されたことにもよると思います。この意見は、教員に伝え、課題の量を適正にするだけでなく、ALH課題の実施後はフィードバックを行うなど、学生の学びが深まるような内容にするようにして対応することを推奨しています。現在、ALHの好事例を集め、教員のFD(ファカルティディベロップメント)研修に活用する予定です。



Q そういう取組がコロナ禍の教育でも学生の
満足度が高い結果につながっているのでしょうか。

A オンライン授業だと、学生と教員の1対1になりがちで、授業前後の学生同士のおしゃべりができないといったデメリットが

ある一方、たとえば、実験科目では、実験方法の説明で手元をうつして見せることができる。録画してMoodleにあげることによって、学生が繰り返しみて復習ができるといったメリットがあります。教員の様々な工夫が満足度につながっているのでしょう。

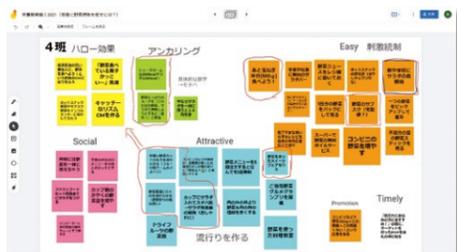
Q 私はよく授業でZoomのブレイクアウトセッション^{※1}
を使って、学生同士が会話できる時間をとっていま
す。GoogleのJamboard^{※2}を活用すると、対面授業
と変わらないグループワークができます。こう考えると、
コロナが終わってもオンラインと対面のブレ
ンド型になる可能性もありそうですね。

A そうですね。それは、どうなるかわかりませんが、コロナ禍でもお茶大の高いレベルの教育を落とさないという気持ちで、取り組んでいます。

※1: 小グループに分ける機能 ※2: 電子ホワイトボードツール

◆◆◆ インタビューを終えて ◆◆◆

お話を伺い、奨学金制度を創設したり、モバイルWi-Fiを無償で貸与したり、「誰一人取り残さない」教育に向けた取組が印象的でした。また、学生の声を取り入れ、コロナというピンチから得られたメリットをうまく活用し、新しい教育スタイルを作っているように感じました。 2021年8月18日実施
聞き手: 赤松利恵(広報推進室長、基幹研究院自然科学系・教授)



① オンライン授業好事例

「Jamboardを利用したグループワーク」(栄養教育論)

JamboardはGoogleが提供する電子ホワイトボードツール。複数人が同時にアクセスし、リアルタイムに内容を共有することができるので、付箋を使ったブレインストーミングもオンラインで行うことができます。画像は、若者に野菜摂取を促すにはどんな方法が考えられるかを議論した際に実際に使用したものの。

担当教員: 赤松利恵教授(生活科学部 食物栄養学科)

② ALH好事例

LA演習「からだのサイエンス」

筋肉や関節の構造についてオンライン授業を行った後に、トレーニングを行っているイラスト資料を配布し、ALHとして実際に自分でやってみて、イラストにかかれた筋肉を意識しやすかった動作と、意識しにくかった動作をあげ、なぜ違いが出たかを論じてもらいました。何となく筋力トレーニングを行うよりも、身体の構造を理解したうえで行ったほうが、より効果的になることを実感してもらいました。

担当教員: 水村真由美教授(文教育学部 芸術・表現行動学科 舞踊教育学コース)



コロナ禍での 留学と国際交流

国際教育センター長の森山新先生に、
留学と国際交流の現状をうかがいます。



森山 新
国際教育センター長、
基幹研究院人文科学系教授
専門は(第二言語としての)日本語教育
学。博士(文学)。最近特にシティズン
シップ教育としての第二言語教育につ
いて研究と教育実践を行っている。

Q お茶大から海外の協定校などへの留学は 現在どのような状況でしょうか。

A 昨年度は全く渡航ができませんでしたが、今年度は文科省の方針転換と本学の海外渡航方針緩和により、3ヶ月以上の渡航を伴う留学が可能となっています。そのため8月以降11名が欧州への準備を進めており、その他の学生も可能性を模索中です。アジアへの留学は主にオンラインで実施される予定で、台湾への留学希望学生がオンラインで現地の授業に参加します。

Q 海外からの留学生の受入れのほうは いかがでしょうか。

A 残念ながら留学生の来日にはまだ困難が多く、オンライン留学を中心に進めています。近年欧州からの留学希望者が増加しているため、時差を考慮し、学生が受講しやすい時間に留学生向けの授業をまとめるようにしています。

実際に留学生が来日する際、昨年度はコロナ禍により入国・入学に必要な手続きのオンライン化が進みましたが、インターネットの整備が十分でない学生があり、一部で手続きが円滑に行えない事態が発生しました。そのため、今年度は来日直後のホテル隔離期間中にオンラインで手続きを可能にするなどのサポートを行っています。

Q 短期の派遣留学プログラムの状況は いかがですか。

A 昨年度は全渡航プログラムが中止となり、オンライン留学のニーズも十分でなく、夏季オンライン短期研修はできませんでしたが、今年度はタイのチェンマイ大で春に実施されたSDGsをテーマとしたプログラムに12名が参加したことから、春学期説明会でオンライン短期留学のよさを参加学生に話してもらい、その結果、夏季にはカリフォルニア大、マギル大、チェンマイ大などの研修に30名近くが参加しました。今年度からはオンライン留学でも本学奨学金が支給されるようになったこともオンライン留学促進につながったと思います。

Q お茶大で開催するサマープログラムの 実施状況はいかがですか。

A 昨年度夏のプログラムは中止となり、オンラインに切り替え2月に実施し、海外から約30名が参加しました。今年度はその経験を生かして準備を進め、時差も考慮して、朝と夕方の方のコースを作りました。その結果、13か国、約80名が参加しました。

サマープログラムでは日本語コースと社会文化コース(「日本におけるジェンダー」、「自然科学」、「日本の社会と健康」の3コース)が開設されました。日本語コースではオンラインを積極的に活用し、事前個別インタビューを実施したり最終発表会に派遣元大学から先生方を招待したりしました。社会文化コースでは各学部から英語による講義を提供していただくとともに、本学と海外の学生が共に学ぶ環境を作り、学生たちは積極的に参加していました。

Q そのほか国際交流の活動として 重要なものがありましたら教えてください。

A 本学は日米大学間の世界展開力強化事業(COIL)に採択され、積極的に展開しています。昨年度はオンライン開催となりましたが、ヴァッサー大の学生とCOVID-19をテーマに国際学生フォーラムを開催しました。事前にZoomを用いて発表準備や交流、ヴァッサー大教員による特別講義を日米合同で行い、より充実したプログラムとなりました。今年度もオンラインで実施予定です。

また本学学生主導で今年6月に女子大学による"Global Intercultural Dialogue"を開催しました。日中韓米のほか、イタリア、カナダ、パレーン、ペルーから約50名の学生が集まり、女子大学の意義について話し合いました。非常に成功裏に終了し、今後も継続することになりました。

日本文化に関する国際交流オンラインイベントも欧米の大学と実施しています。本学学生は日本文化紹介動画を作成し、先方と共有、討論が行われました。言語の壁を超え発表や討論に参加した結果、留学を考えるようになった学生もいます。



Q 最後に今後の展望をお聞かせ いただけますでしょうか。

A コロナ禍が留学にとって大きな障害となったことは事実です。しかし一方でオンラインの積極的な活用を促し、それはキャンパスのグローバル化をもたらしました。オンライン化により、広範な学生に留学の機会を提供できるようになったことは大きな意義だと思います。今後もこれをさらに発展させ、有効に用い、本学のグローバル化を促進して行きたいと思っています。

聞き手: 小松祐子(基幹研究院人文科学系・教授)

コロナ禍ならではの 授業実施例 ～生活科学概論～

授業の概要

生活科学部の5つの学科・講座の教員が担当し、最後は、講義内容を踏まえて、「afterコロナの時代は生活科学はどのような貢献ができるか」について、全体討論を行いました。
pick up講義:「マスク」について、文系・理系の視点からの講義がありました。まずは、生活科学部がこれの授業です。担当の雨宮先生、難波先生に授業の内容をご紹介します。

お茶の水女子大学の生活科学部は、文系・理系の枠を超えて、幅広い視点から、生活を科学する学部です。学部共通科目である「生活科学概論」では、毎年1つのテーマを決め、分野の異なる教員からそのテーマについて、講義そして討論する授業です。コロナ禍ならではの、学ぶべきこととして、今年度は「コロナと生活」をテーマに授業を行いました。

- 01.オリエンテーション
- 02.コロナによる食生活の変化
(担当: 赤松、食物栄養学科)
- 03.with/afterコロナー身を守る
繊維製品
(担当: 雨宮、人間・環境科学科)
- 04.コロナと精神衛生、リスク認知
(担当: 高橋、心理学科)
- 05.日本におけるスペイン風邪とマスク
(担当: 難波、人間生活学科生活文化化学講座)
- 06.Covid-19感染症の
社会経済に与える影響と政策
(担当: 大森、人間生活学科生活文化化学講座)
- 07.コロナにおける健康食品の広告
(ゲストスピーカー: 奥原、東京大学)
- 08.ディスカッション

with / afterコロナー身を守る繊維製品 担当: 雨宮 敏子(人間・環境科学科助教)

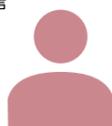


生活材料の中でも特に衣に関わる繊維を専門としています。担当初回はコロナ禍の衣生活への影響について、衣料品の生産販売や消費活動の変容など、消費科学的な視点で紹介しました。翌週は、身をまもる繊維製品をテーマとし、身近な存在となったマスクについて、材料や構造、捕集の仕組み、性能評価方法を中心に説明しました。後の回で、難波先生が文化的立場からマスクの話がされることを念頭に、異なるア

プローチで話ができればという狙いもありました。まず、ガーゼマスクを分解して1枚から15枚まで重ねた様子、ポリウレタンマスク、ポリプロピレン製の不織布マスクを同倍率の拡大画像で、ウイルスや花粉の直径と共に示しました。学生のコメントでは、不織布マスクの材料を初めて知った人が多く、ウレタンマスクの粗密さや、捕集の仕組みとして繊維間の空隙と粒径の関係だけでなく繊維表面への吸着が関わっていることに驚いたとする記述が多くみられました。どの分野においても製品を構成する材料や性質を知ることが重要で、関心を持ってほしいと思うと同時に、教育する側としての工夫の必要性も感じました。最後に、関連研究や、マスクやアクリル素材の大量廃棄が環境に与える影響について触れました。各分野の教員がそれぞれの視点で講義する本概論全体を通して、生活科学の奥深さや楽しさを感じ、物事に対する多角的な捉え方が身に付くことを期待します。

左上: ウレタンマスク、右上: ガーゼマスク(15枚重ね、一般的な綿ガーゼマスク)、左下: 花粉・ウイルス飛沫対策用不織布マスク、右下: 特に花粉・ウイルス飛沫対策をうたっていない不織布マスク。一口に不織布マスクと言っても目の粗いものなど色々あり、不織布であれば何でもよいということではない。

Voice 受講生の声



生活科学部 人間生活学科1年 黒川 清楓

生活科学部の様々な分野の先生が、コロナや生活という共通の切り口から色々な話をしてくださり、改めて私たちの暮らしについて考えることができました。理系や文系という枠組みにとらわれず複数の視点から生活を見つめ、色々な学科の学生の多様な意見を聞くことができ、有意義な時間でした。



生活科学部 人間・環境科学科1年 菅野 萌々寧

自分がこの一年感じてきた変化や不安に関してわかったり疑問が膨らんだり、自分の生活を多角的に見るような授業でとても面白かったです。今持った視点を自分の生活や学習に生かしていければと考えています。

日本におけるスペイン風邪とマスク 担当: 難波 知子(人間生活学科生活文化化学講座准教授)



私の専門は服飾史なので、感染症とマスクの歴史を授業で取り上げました。日本で感染予防のマスクが普及したのは、今からおよそ100年前にスペイン・インフルエンザが大流行したときです。日本国内で45万人を超える死者が出たといわれています。当時はまだ細菌よりも小さいウイルスは発見されていませんでしたが、飛沫により感染が引き起こされることが分かっていました。そこで政府は「人の集まっている場所」でマスクを付けることを呼びかけました。一般市民にマスク着用を促すためにポスターが作成されたり、貧困者に無償でマスクを交付した自治体もありました。昔のマスクは「白」というイメージがあるかもしれませんが、明治期に輸入されたマスク(呼吸器「レスピレーター」)は「黒」でした。インフルエンザが流行した大正期には、別珍(ピロード)や革製のもの、エンジャや紺、茶色などさまざまな色のマスクも登場しました。医学的な知識や技術は当時と現在とでは大きく異なりますが、スペイン・インフルエンザを題材とした小説を読むと、未知の感染症に対する不安やそれに対する人びとの行動に共感を覚えます。これまで人びとがどのように感染症と対峙してきたのか、歴史を振り返ってこれからの感染症との付き合いを考えてみるのもよいでしょう。



左: 大正9年に作成されたマスク着用を推奨するポスター
(国立保健医療科学院図書館蔵/内務省衛生局蔵、流行性感冒、1922.3.)
右: 最高級婦人用ミツワマスク(個人蔵)